Rikkyo Psychological Research
1999, Vol. 42, 83-92

原　著

改訂版マキャベリアニズム尺度作成の試み[1]

立教大学　古賀ひろみ[2]

A construction of revised machiavellianism scale

Hiromi Koga

The purpose of this study is to revise Mach-IV and to construct a Japanese version of Machiavellianism scale (Christie & Geis, 1970), introducing subconcepts of interpersonal competence in a group situation. 297 undergraduates completed the Revised Machiavellianism scale and other personality scales. Factor analysis of the Revised Machiavellianism scale extracted a three-factor solution: 1) interpersonal control (IC), 2) unmorality (UM), 3) anti-humanism (AH), Alpha reliability coefficients of IC and UM were .76 or greater. The IC subscale was independent of the social desirability response set. IC correlated positively with private self-consciousness and two subscales of self-monitoring. UM did not correlate with any personality scales. AH correlated positively with social anxiety and negatively with self-esteem. The low magnitude of the correlation obtained was interpreted as supporting the discriminant validity of three subscales of Machiavellianism.

Key words: machiavellianism, interpersonal control, unmorality, anti-humanism, self consciousness, self-monitoring, self-esteem

近年，社会心理学においては集団の枠組み自体を中心とした集団行動の研究が再び隆盛を示しつつある．社会心理学における集団研究は，初期にはMcDougall (1921) などに見られるように，個人の心理状態の合計以上の作用が集団行動にはあるとする立場がとられていた．これに対し Allport (1924) は，個人の行動は本質的には集団においても変化しないとして行動主義の立場から集団研究を行い，これ以降社会心理学では集団行動を個人的・対人的特性によって説明する還元主義の立場が主流であった．しかし 1970 年代中頃からTajfel (1979) やTurner et al. (1987) によって，集団にカテゴライズされることが集団行動を左右するとする社会的アイデンティティ理論 (social identity theory)，自己カテゴリー化理論 (self categorization theory) が唱えられ，再び集団自体に主眼をおいた集団研究が主流となってきている．これらの研究では主に最小集団パラダイムを用いた集団現象（例えば，内集団ひいき，凝集性）の分析に焦点が絞られているため，個人差などの要因の検討にまで研究が充分に及んではいない．しかしながら，個人差要因を考慮していくことは，現実場面における集団行動の理解を深めていくうえで必要であろうと思われる．この面で重要と思われるパーソナリティ概念の一つとして，マキャベリアニズム尺度が考えられる．

マキャベリアニズム (Machiavellianism) とは，Machiavelli (1940) が君主論で主張したような，自分自身の目的という視点から他者を眺め，また他者を操作し，日和見であるべきという信条に同意

[1] 本研究は，日本社会心理学会第 40 回大会 (1999) で発表したものを再分析し，加筆訂正したものである．

[2] 本論文の作成にあたりご指導いただきました立教大学文学部教授　押見輝男先生に深く感謝申しあげます．

する，またそのように行動するような人（Machiavellian）のパーソナリティをさす．Christie & Geis(1970)は，権威主義的パーソナリティについて研究する中で，成員に対して効果的に影響を与え，操作するリーダーがいることから，君主論でMachiavelliが提言したような特性が個人のパーソナリティとして存在すると考えた．そしてその重要な特徴として1．対人関係における感情が比較的欠けており，2．慣習的な道徳への関心に欠けているが，3．精神病理と言うほどではなく，4．イデオロギーへの傾倒が低いことをあげた．Christie & Geis(1968)はこれらの特徴に基づいて君主論の命題を踏まえた71項目からなる尺度を作成し，さらにその中から弁別力のある20項目を抜粋してマキャベリアニズム(Mach)の個人差を測定する尺度を作成した．この尺度はMach-IVと呼ばれている．

Machが高い人の具体的特徴として，冷静で非道徳的かつ利己的，また現実原則を重視するなどがあげられている．また，対人関係においてマキャベリアニズムがどのように影響を及ぼすかを検討するため，被験者を高Mach群・中Mach群・低Mach群にわけた実験がいくつか行われているが，その結果，高Mach者は他者と対面した場の中で自分の行動を工夫でき，自ら行動を起こすような場面で他人への操作や説得が多く，またゲーム場面では計算高く他者を利用しながら勝利をおさめる傾向が認められている．また，自由裁量の余地が無いような状況下においては既存の枠内で行動するものの，低Machの人ほどまじめではなく，機械的に処理するような傾向も見られている．逆に低Machの人は構造化された状況を受け入れやすく，自己よりも他者に対して意識の焦点化をしやすいため，他人の指示に従いやすいという傾向が見られ，なおかつゲーム場面においては高Mach者に利用されやすいといった結果が得られた．このような結果をもとに，高Mach群の集団行動上の特徴としては，社会的影響への抵抗，自己の認知への指向性，集団構造に対する主導性，対人操作性があげられている(Christie & Geis, 1970)．

また，Exline et al.(1970)は，対人関係におけるノンバーバルコミュニケーションとマキャベリアニズムの関係についての実験を行っている．実験者の不在の間にサクラに被験者が課題を正直に行わないようそそのかした後，実験者が課題をごまかしたのではないかと非難している間の被験者の視線量を調べると，高Mach者は低Mach者よりごまかしを否定しているときの視線量が多く，また実際にごまかしを行った高Machの被験者のほうがさらに視線量が多かった．

このように，マキャベリアニズムの特性，とくに集団行動上の特徴である対人操作性は対人行動・集団行動を考えるときに有効な個人差要因であると考えられる．しかし近年わが国ではMachを用いた対人関係や集団の研究はあまり行われていない．この理由の一つとして，尺度上の問題があげられる．Christie & Geis(1970)はMach-IVを1因子構造であるとしているが，わが国の研究では複数の下位因子が認められ，しかも尺度の心理測定的結果も満足のいくものではない（池田・小口，1993）．このことから，集団行動の個人差要因としてマキャベリアニズムを利用するとき，尺度の心理測定的内容を再検討しておくことが必要であると思われる．そこで本研究ではMach-IV尺度の信頼性，妥当性について検討を加える．さらに，集団行動の個人差要因として用いるときにMach-IVの項目には集団行動に関する項目の少ない点が問題であると思われるので，集団内の行動に関わる新項目を追加して尺度を構成する．また，改訂版尺度の概念的妥当性を検討するために，自己意識，セルフモニタリング，自尊感情の各尺度を取り上げる．

自己意識（self-consciousness: Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975）は，自己の状態に注目する傾向の特性で，他人から見られている自己側面に注目しやすい公的自己意識（public self-consciousness），私的な内面的自己に注目しやすい私的自己意識（private self-consciousness）にわかれる．公的自己意識の高い人は，自己呈示の効果に規定された行動を示しやすく，他者からの受容を対人行動の

第一目標とし，そのためには自己の信念の譲歩や自己の利益追求を犠牲にする傾向が見られる(押見，1992)．これに対してMachの高い人は自己の利益追及という目標のために他者を操作しようとする行動傾向をもつので，マキャベリアニズムと公的自己意識とは弱い負の相関か，あるいは相関が見られないと予想される．私的自己意識は，自己呈示の効果の影響がきわめて弱く，自己の信念と一致した行動傾向を示す．この自己の価値観を遵守する行動は高Mach者の自己の認知に対する志向性の高さと通じるところがあるが，私的自己意識の高い人は目標達成のための対人操作性のスキルは認められないので，私的自己意識とマキャベリアニズムとは無相関，あるいは弱い正の相関ではないか予想される．

対人操作性のスキルと関連したパーソナリティ特性としてはセルフモニタリング(self-monitoring: Snyder, 1974)があげられる．これは，対人場面において他者の行動を観察し，自己表出や自己呈示が社会的に適切かどうかを考慮して自分の行動を統制するパーソナリティ特性である．したがってセルフモニタリングとマキャベリアニズムとの間には正の相関が予想されるが，セルフモニタリングは自己呈示への関心に関わる概念であり，マキャベリアニズムに含まれる冷酷さや非情さには関連がないと考えられるので，正の相関が見られたとしても相互の独立性を脅かすほど大きくはないと予測される．Snyder(1974)の研究では、両者は無相関であったが，近年セルフモニタリング尺度に対して，下位構造が安定しない等の問題点が指摘され，Lennox & Wolfe(1984)がSnyderの尺度を再構成した改訂セルフモニタリング尺度を作成している．これは，オリジナルが5つの構成概念からなるのに対して，自己呈示を修正する能力(ability to modify self-presentation)と他者の表出行動への敏感さ(sensitivity to expressive behavior)の2因子構造を見出した尺度である．自己呈示を修正する能力とは，状況や他者の要求等にあわせて自己の態度や行動を統制する能力をさし，他者の表出行動への敏感さとは他者の表情や態度などから相手の感情を理解する能力をさしている．自分に有利なように人を操作するという高Mach者の行動を考えるとき，他者の反応や要求にあわせて自己呈示を変えていく必要性があると考えられるので，自己呈示の修正能力とMachとの間に正の相関が見られるであろう．また，マキャベリアニズムのパーソナリティの特長の一つとして対人感情に欠けるという点があげられていることから，他者の表出行動への敏感さとは負の相関が考えられる．本研究ではLennox & Wolfe(1984)のセルフモニタリング尺度を用いて，この予想を検討する．

最後に自尊感情(self-esteem)との関係であるが，高Mach者が自己の利益のために対人操作性のスキルを積極的に行使する背景として，高い自尊感情の存在が予想されることから，マキャベリアニズムと自尊感情との間には正の相関が見られると考えられる．

また，本研究ではMarlowe & Crowne(1964)の社会的望ましさ尺度(Social Desirability Scale)との相関を調べることによって，Mach尺度における反応バイアスの介入しやすさについて検討する．また，Cronbachのα係数により，内部一貫性の検討も行う．

方　法

改訂版マキャベリアニズム尺度の作成

Christie & Geis(1970)のMach-IV 20項目を新たに翻訳し，さらに集団内における対人操作性に関係すると考えられる8項目を新たに追加して，28項目とした(項目内容については表1参照[3])．回答は“非常に強く思う”(5点)から“全く思わない”(1点)の5件法とした．

他に使用した尺度

改訂版マキャベリアニズム尺度の概念的妥当性・弁別的妥当性について検討するために使用した尺度は以下の通りである．

自己意識尺度　自己意識の測定には，Fenig-

stein, Scheier & Buss(1975)の Self Consciousness Scaleを池田・押見(1999)が邦訳したものを用いた．この尺度は全体で23項目あり，私的自己意識10項目，公的自己意識7項目，社会的不安(対人場面において動揺しやすい性質) 6項目の3つの下位尺度からなる．被験者には“非常にあてはまる”(5点)から“全くあてはまらない”(1点)の5件法で回答させた．

セルフモニタリング尺度　セルフモニタリングの測定には．Lennox & Wolfe(1984)の Revised Self-Monitoring Scale を岩淵・田中・中里(1982)，大渕(1991)の訳を参考に日本労働研究機構が訳出したものを用いた．これは自己呈示を修正する能力7項目，他者の表出行動への敏感さ6項目の2つの下位尺度からなる尺度である．被験者には“非常にあてはまる”(5点)から“全くあてはまらない”(1点)の5件法で回答させた．

自尊感情尺度　自尊感情の測定にはRosenberg(1965)のSelf-Esteem Scaleを池田・小口(1993)が邦訳したものを用いた．この尺度は10項目からなり，被験者には“非常にあてはまる”(5点)から“全くあてはまらない”(1点)の5件法で回答させた．

社会的望ましさ尺度　社会的望ましさの測定には Marlowe & Crowne(1964)の Social Desirability Scaleを池田・小口(1993)が邦訳したものを用いた．この尺度は33項目からなり，社会的望ましさを単1次元で測定している．被験者には“あてはまる”(2点)“あてはまらない”(1点)の2件法で回答させた．

被験者と手続き

被験者は立教大学，川口女子短期大学の学生297名(男性56名，女性221名，不明20名)である[4]．平均年齢は18.9歳(18～27歳，$SD=1.15$)である．心理学の授業中に各尺度を1冊にまとめた冊子を配布し，集団実施法で行った．また，実施後に尺度についての説明を行った．

結　果

因子構造

まず逆転項目の素点を変換した上で，改訂版Mach尺度の下位因子を調べるため，主成分分析による因子分析を行った．固有値の推移を見たところ，第Ⅰ因子は4.574，第Ⅱ因子は3.538，第Ⅲ因子は1.719，第Ⅳ因子は1.372，第Ⅴ因子は1.258と減少しており，第Ⅲ因子までの固有値が比較的大きく，第Ⅳ因子以降は減少の程度が小さくなっている。また，第Ⅲ因子までの累積寄与率は35.1%に達しているので，本尺度は3因子構造であると考えられる。次に3因子でoblimin回転を行ったところ，項目2“相手が聞きたいと思うことを教えるのが，人を扱うもっとも良い方法だ”が第Ⅰ因子と第Ⅱ因子間で，項目18“余計なものを切り捨てていかなければ，成功することは難しい”と項目21“どう動けば，自分にとって有利な状況になるかを考えて行動する”(新項目)が第Ⅰ因子と第Ⅲ因子間で負荷量の差が.02程度と非常に接近していた．そこで，これらの項目を削除し，改めて主成分分析による因子分析を行い固有値の推移を見たところ，第Ⅰ因子は3.999，第Ⅱ因子は3.516，第Ⅲ因子は1.696，第Ⅳ因子は1.327，第Ⅴ因子は1.258であり，項目削除前と同じような固有値の推移が認められた．また，第Ⅲ因子までの累積寄与率は36.9%であったことからも，やはり3因子構造を持つとして，再び3因子でoblimin回転を行い，因子の解釈を試みた結果，**表1**にみられるようなパターン行列となった．第Ⅰ因子で因子負荷量の高い項目は第23項目“最終的にグループを成功に導くためなら，仲間から誤解されたとしても仕方ないと思う”，第26項目“グループの利益を守ることで最終的に個人の利益につながるなら，そのために今，個人的には少しくらい損になっても仕方ないと思う”，第24項目“対立を解決する

[3] 因子分析の際、因子負荷量が項目間で非常に近接していた3項目を削除した。削除された項目については後述する。

[4] 男女の人数に4倍近い差があるので、本研究では性差については検討しない。

表1　Mach 尺度の回転後のパターンと行列

		成分 I	II	III	H^2
23	最終的にグループを成功に導くためなら，仲間から誤解されたとしても仕方ないと思う．＊	.680	-.004	.078	.4478
26	グループの利益を守ることで最終的に個人の利益につながるなら，そのために今，個人的には少しくらい損になっても仕方ないと思う．＊	.639	-.202	.232	.4556
24	対立を解決するためには，嘘も時には必要だ．＊	.587	.014	-.180	.4193
22	自分たちを有利にするため他人同士をあらそわせる，というやり方は有効だと思う．＊	.553	.226	-.334	.5342
25	自分の周りの人間関係を客観的に把握している．＊	.547	-.068	.043	.2994
28	何か事が起きたとき，知らず知らずのうちに自分が中心になって対処していることがある．＊	.540	-.149	.160	.3132
5	人はきっかけがあれば誰でも悪の道へ走るだろうと考えておけば無難である．＊	.504	.091	-.254	.3747
1	自分がなぜそうしたのかという理由を話すことが何かの役に立つならともかく，そうでないのなら話すべきではない．	.503	.036	-.018	.2563
12	他人を信頼しきってしまうと，とんでもない目にあう．	.481	.043	.209	.3162
20	父親の死を忘れるより，破産したことを忘れる方が難しい．	.451	.227	-.155	.2990
6	どんなときでも正直は最良の方策だ．(R)	.081	.718	-.006	.5174
7	嘘をつくことに弁解の余地はない．(R)	.095	.698	.179	.5121
14	たいていの人は敢然と困難に立ち向かうものだ．(R)	.021	.693	.195	.5128
4	本来的には，人は親切で優しいものだ．(R)	-.171	.611	-.218	.4482
17	「だまされる人は次から次へと生まれる」という格言は間違っている．(R)	.101	.524	.049	.2794
16	あらゆる面でよい人というのもいるもんだ．(R)	-.018	.513	.142	.2837
9	一般的に言えば，不正な手段で偉くなるより，貧しくても正直であるほうがよい．(R)	-.088	.511	-.349	.3874
10	誰かに自分のために何かして欲しいと頼むときには，もっともらしい理由を言うよりも，本当の理由を言うほうがよい．(R)	-.122	.502	-.283	.3425
11	世界のトップにある人はたいてい，清潔で道徳的な生活を送っている．(R)	.063	.464	.367	.3370
3	人は，道徳的にただしいと確信するときだけ行動を起すべきである．(R)	-.240	.445	.194	.3195
15	「長いものにまかれろ」というのは正しいやり方だと思う。	.046	-.146	.659	.4680
8	強制されなければ人はまじめに働こうとしないものだ．	.059	-.015	.622	.4053
19	不治の病に苦しむ人は，安楽死を望むものだと思う．	.113	-.035	.431	.2196
13	多くの犯罪者と，そうでない人とのもっとも大きな違いは，犯罪者がつかまってしまうようなへまをしたことである．	.313	.146	.411	.3374
27	人の意見に振り回されることが多い．(R)＊	-.012	-.114	.342	.1271
	固有率	3.999	3.516	1.696	
	寄与率	16.0%	14.1%	6.8%	

注：＊．新項目
(R)．逆転項目

ためには，嘘も時には必要だ”などである．これらの項目に共通するのは，自己の利益を得るためには当座の不利益すら気にせずに，冷静，あるいは冷酷に動こうとする姿勢であり，これを対人操作性因子(interpersonal control, 以下ICと記す)と命名する．第II因子に負荷量の高い項目は第6項目“どんなときでも正直は最良の方策だ”(逆転項目)，第7項目“嘘をつくことに弁解の余地はない”(逆転項目)，第14項目“たいていの人は敢然と困難に立ち向かうものだ”(逆転項目)などである．これらの項目に共通するのは道徳的によいとされるようなことに対して不信を持つような姿勢であるので，これを非道徳性因子(unmorality, 以下UMと記す)と命名する．第III因子に負荷量の高い項目は第15項目”“長いものにまかれろというのは正しいやり方だと思う”，第8項目“強制され

なければ人はまじめに働こうとしないものだ”，第19項目“不治の病に苦しむ人は，安楽死を望むはずだと思う”などである．これらの項目に共通するのは，人というのは楽な方向へ流れようとするものであるという人間性に関するネガティブな認識なので，第Ⅲ因子を反人道主義の因子(anti-humanism, 以下AHと記す)と命名する．次に，各因子に含まれた項目の得点を加算して下位尺度の得点を算出した．マキャベリアニズム尺度及び下位尺度の記述統計量を**表2**に，得点分布を**図1－1～図1－4**に記す．また，下位尺度間の内部相関を算出したところ、ICとAHの間に有意な相関が見られたが，ICとUM，UMとAHとの間は無相関であった（**表3参照**）．

表2　下位因子の記述統計

	対人操作性因子	非道徳性因子	反人道主義因子
全体（n＝270）			
　平均値 | 26.79 | 33.55 | 11.80 |
　標準偏差 | 6.49 | 6.78 | 3.60 |
男性（n＝54） | | | |
　平均値 | 30.80 | 37.04 | 12.41 |
　標準偏差 | 7.36 | 5.64 | 3.76 |
女性（n＝199） | | | |
　平均値 | 25.89 | 32.39 | 11.67 |
　標準偏差 | 6.05 | 6.80 | 3.23 |

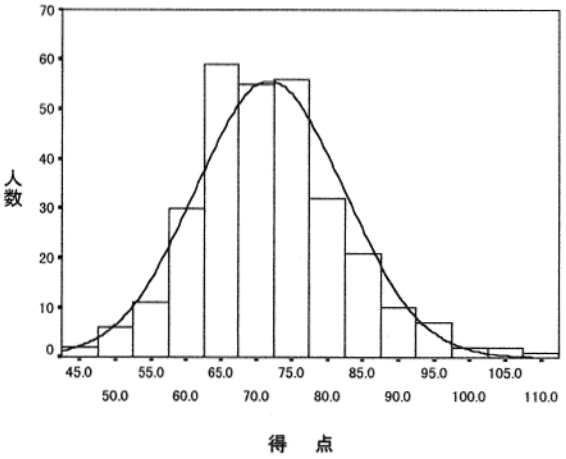

図1-1 マキャベリアニズム尺度のヒストグラム

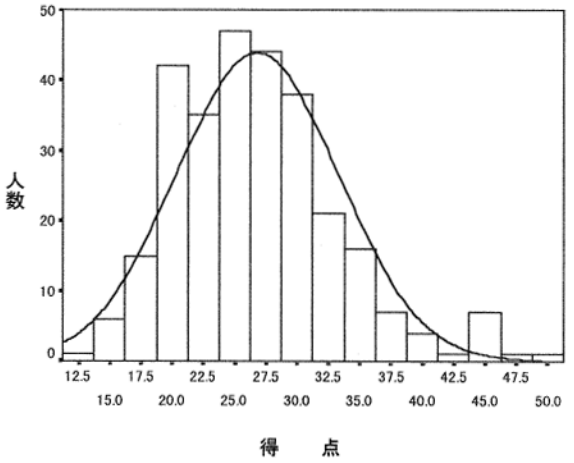

図1-2 対人操作性因子のヒストグラム

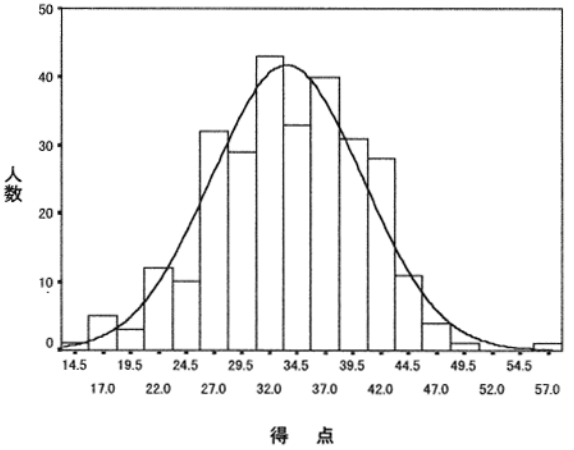

図1-3 非道徳性因子のヒストグラム

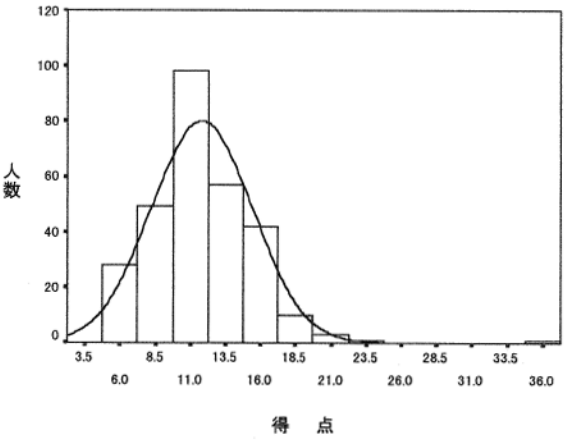

図1-4 反人道主義因子のヒストグラム

表 3　因子の内部相関行列

	因子		
	IC	UM	AH
対人操作性因子（IC）			
非道徳性因子（UM）	-.047		
反人道主義因子（AH）	.395**	-.081	

**．相関関係は1%水準で有意（両側検定）

信頼性

Mach全体と，IC, UM, AHそれぞれの信頼性係数を算出した．結果，Mach全体ではα＝.7229, IC尺度ではα＝.7648，UM尺度ではα＝.7715であったが，AH尺度ではα＝.5145と十分な信頼性は得られなかった．

他の尺度との相関

次に概念的妥当性，弁別妥当性を検討するため，Mach全体（以下Machと記す），また各下位因子と自尊感情（以下SEと記す），社会的望ましさ（以下SDと記す）との相関を調べた．自己意識とセルフモニタリングについてはそれぞれ下位因子である公的自己意識（以下PubSCと記す）・私的自己意識（以下PriSCと記す），また自己呈示修正能力（以下SM-Mと記す）・他者の表出行動への敏感さ（以下SM-Eと記す）との相関を調べた．なお，自己意識尺度に含まれている社会的不安尺度の得点（以下SOCと記す）とも相関を算出した．結果，対人操作性因子と私的自己意識との間に弱い正の相関が，また自己呈示修正能力および表出行動への敏感さと対人操作性との間にも正の相関が見られた．反人道主義因子と公的自己意識，社会的不安との間には弱い正の相関が，自尊感情との間には弱い負の相関が得られ，マキャベリアニズム全体と自己呈示の修正能力との間には正の相関が得られた．また，社会的望ましさと非道徳性因子，反人道主義因子，マキャベリアニズム尺度全体との間にそれぞれ負の相関が得られた（**表4参照**）．

考　察

本研究で作成した改訂版マキャベリアニズム尺度は下位因子として，対人操作性・非道徳性・反人道主義の3因子が得られた．これはChristie & Geis(1970)が述べているMachの特徴であるところの慣習的な道徳への関心に欠けるという点と，集団行動における対人操作性の高さと，Machiavelliが君主論で述べている日和見な態度に通じていると考えられる．信頼性についても，Mach尺度全体，IC尺度，UM尺度はいずれも.70以上と十分な信頼性が得られたが，AH尺度については.5145と

表 4　各パーソナリティ尺度とMachの相関関係

	PriSC	PubSC	SOC	SE	SM-M	SM-E	SD
対人操作性因子	.102*	-.042	-.076	-.001	.235**	.222**	.033
非道徳性因子	.023	-.022	.003	.042	-.022	-.070	-.244**
反人道主義因子	.009	.097*	.134**	-.127**	.004	-.039	-.213**
マキャベリアニズム	.076	-.016	.002	-.014	.126**	.076	-.187**

注：**．相関関係は1％水準で有意
　　*．相関関係は5％水準で有意
　　PriSC　private self-consciousness.
　　PubSC　public self-consciousness.
　　SOC　social-anxiety.
　　SE　self-esteem.
　　SM-M　ability to modify self-presentation.
　　SM-E　sensitivity to expressive behavior.
　　SD　social desirability.

十分な信頼性は得られなかった．またICとAHとの間の相関は.398と高く，下位因子の独立性は完全に保証されなかった．この理由として，行動の主体の問題が挙げられる．オリジナルの尺度では，項目内容を行っている主体が自分である項目と，人間の一般的な行動傾向についての項目が存在するが，訳出した時点で主体がどちらなのかが曖昧になってしまった可能性がある．ICは基本的に自己の行動に関する項目，UMは人に対する一般的な認識の項目であるが，AHについては自己の行動とも，一般的な認識とも，どちらにもとれる項目が含まれている．しかし，自分が易きに流れやすいということと，人は基本的に易きに流れやすいものだと考えているということはまったく別の問題であり，どちらと被験者が受け止めたかによって回答は全く違ってくることが予想される．このことがICとAHの相関に関係しているのではないだろうか．また，今回オリジナルの尺度に含まれている項目の中で，因子間の負荷量の差がほとんどない項目が2項目みられた．これらの項目の内容を見ると，ICとUMとに負荷量が高かった項目2“相手が聞きたいと思うことを教えるのが，人を扱うもっとも良い方法だ”には“人を扱う”，すなわち人を操作するという内容と，人は自分の望むようなことを言わなければ動かないのだという道徳性への不信がともに存在しているし，ICとAHとに負荷量が高かった項目18“余計なものを切り捨てていかなければ、成功することは難しい”には，成功のためには人を切り捨てていくという対人操作性の中に含まれる非情さと，人を切り捨てていくというような厳しさを持たずに安逸な方向に流れると人は成功しないのだ，という認識の2つが含まれている．このようなことが2つの下位因子に負荷量が高かったということにつながっていると考えられる．

次に，回答者の社会的望ましさバイアスの問題である．マキャベリアニズムのように，内容に非情さや非道徳性などを含む尺度は，被験者に社会的望ましさのバイアスがかかる可能性が予測されるが，本研究の結果，Mach尺度全体，UM，AHの各尺度で負の相関が得られたものの，相関係数はすべて.25以下と弱い相関であった．ここから，解釈に注意は必要であるが，バイアスの影響は大きくなく，無視しても問題ないと考えられる。なお，相関の見られなかったIC尺度では回答バイアスの介入は無視できる．

Mach尺度の妥当性については，私的自己意識，公的自己意識，社会的不安，自己呈示の修正能力，他者の感情表出への敏感さ，自尊感情のいずれとも相関係数は.24以下であり，尺度の弁別性，独自性に対して問題となるような高い相関は見られなかったことから，本改訂尺度の弁別妥当性は保証されたとみなすことができる．各尺度との相関関係であるが，対人操作性因子と私的自己意識，自己呈示修正能力との間には予想したような正の相関が見られたが，表出行動への敏感さとは予想に反して正の相関が見られ，自尊感情とは相関が見られなかった．表出行動への敏感さと正の相関が見られた，という点に関しては，対人感情に欠けている，ということが必ずしも他者の感情に無頓着ということを意味しないからだと考えられる．逆に，相手の考えや感情にある程度敏感であるというように，相手をよく知らないと効率的な操作はできないのだろう．また，自尊感情と相関が見られなかったことについては，対人操作性が，冷酷に，あるいは誤解されても利益を求めようとする性質であって，自己への肯定的評価や否定的評価に応じて変化するものではないからだと考えられる．また，非道徳性因子とは，どの特性とも相関が見られなかった．自己意識との相関が見られなかったということは，非道徳性が他者への一般的な認識であって自己とは無関係であることを，またセルフモニタリングの下位尺度と相関が見られなかったということは，他者への一般的認識が状況に応じて変わるものではなく，どちらかというと永続的な認識であるということ，また自尊感情との相関が得られなかったことも，自己の評価を高めるために他者を良く見ないのではなく，環境等から培われた永続的な認識であることを示しているように思われる．最後に反人道主義因子で

あるが，社会的不安との間に正の相関が，自尊感情との間に負の相関が見られた．この相関については，上述した項目内容における主体の曖昧さによって，自分が易きに流れやすいという認識が自尊感情に影響を及ぼしたとも考えられるが，自尊感情と社会的不安の負の相関が報告されている（池田・押見，1999）ことなども関係した可能性がある．実際，本研究でも社会的不安と自尊感情との相関は$r=-.370$（$p=.000$）と負の相関がみられた．そこで，自尊感情と社会的不安の一方を制御変数とし，もう一方とAHとの偏相関係数を算出したところ，自尊感情とAHの偏相関は$r=-.087$（$p=.144$），社会的不安とAHの偏相関は$r=-.092$（$p=.120$）と両者ともに有意な値は得られなかった．ここから，AHと本研究で使用した他のパーソナリティ尺度との間には，実質的な相関はなかったと考えられるのではないだろうか．もしそうであるならば，この反人道主義因子も非道徳性因子と同様，他者への一般的な認識であるといえるのかもしれない．

最後に，マキャベリアニズムの集団行動への応用可能性について言及したい．人は集団に所属することによってどのように行動が変化するのか．この問題に回答しようとしているのがTajfel(1979)の社会的アイデンティティ理論であり，Turner et al. (1987)の自己カテゴリー化理論であるが，社会的アイデンティティ理論の研究においては，集団の枠組みから個人への影響が主に取り沙汰される．しかし人はその影響に対して受容的なだけなのであろうか．社会的アイデンティティ理論では，集団がポジティブな社会的アイデンティティを十分にもたらさないとき，人は集団から離れようとすると仮定されているが，集団間の移動可能性が高くても，人によっては集団に留まり，集団を自己高揚動機が満たせるような形へと変えようと働きかけるケースも考えられる．高Mach者は集団の構造に自己の介入する余地があるとき，自己に利益をもたらすように努力するとされている（Christie & Geis, 1970）．古賀(1999)は，集団の状況に問題を感じている，あるいは否定的な感情を抱いている場合，低Mach者より高Mach者のほうが，より集団状況を解決しようとすること，またそのために与えられた状況を利用する可能性があるという結果を得ている．このような研究結果は，個人から集団への働きかけに関わる現象の解明にマキャベリアニズムの概念を応用することが現実場面における集団行動を考えるうえで有用であることを示唆しているといえよう．

引用文献

Allport, F. H. 1924 *Social psychology.* New York: Houghton, Mifflin.

バス，A. H. 大渕憲一（監訳）1991 対人行動とパーソナリティ　北大路書房．

Christie, R., & Geis, F. L. 1970 *Studies in Machiavellianism.* New York: Academic Press.

Christie, R., & Geis, Florence. 1968 *Some consequences of taking Machiavelliseriously.* In E. F. Borgotta & W.W. Lambert (Eds.),*Handbook of personality theory and research.* Chicago: Rand McNally, 1968.

Crowne, D. P., & Marlowe, D. 1964 *The approval motive.* New York, Wiley.

Exline, R. V., Thibaut. J., Hicky, C. B., & Gumpert, P. 1970 *Visual interaction in relation to Machiavellianism and an unethical act.* In R.Christie, & F. L. Geis (Eds.), Studies in Machiavellianism. New York: Academic Press.

Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A.H. 1975 *Public and private self-consciousness: Assessment and theory.* Journal of Consulting and Clinical Psychology, **43**, 522-527.

池田善英・押見輝男　1999 自己意識尺度オリジナル版の評価　立教大学心理学科研究年報，**41**，51-61．

池田善英・小口孝司　1993 対人行動に関わる既存の個別的パーソナリティ尺度の検討(II)—既存の尺度の構造分析について—　日本グループダ

イナミックス学会第41回大会発表論文集, 172-173.

石原俊一・水野邦夫　1992 改訂セルフモニタリング尺度の検討　心理学研究, **63**, 47-50.

岩淵千明・田中國夫・中里浩明　1982 セルフ・モニタリング尺度に関する研究　心理学研究, **53**, 54-57.

古賀ひろみ 1999 下位集団間関係が凝集性と差別行動におよぼす影響 —マキャベリアニズム尺度を使用して— 日本心理学第63回大会発表論文集, 94.

Lennox, R. D., & Wolfe, R. N. 1984 *Revision of the self-monitoring scale.* Journal of Personality and Social Psychology, **46**, 1349-1364.

McDougall, W. 1921 *The group mind.* Cambridge: Cambridge University Press.

Machiavelli, N. 1940 *The Prince. The discourses.* New York: Modern Lirary.

押見 輝男　1992　自分を見つめる自分　自己フォーカスの社会心理学　サイエンス社

Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image.* Princeton: Princeton University Press.

Snyder, M. 1974 *Self-monitoring of expressive behavior.* Journal of Personality and Social Psychology, **30**, 526-537.

菅原健介　1986　賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求－公的自己意識の強い人に見られる2つの欲求について　心理学研究, **57**, 134-140.

Tajfel, H., & Turner, J. C. 1979 *An integrative theory of intergroup conflict.* In W. G. Austin, & S. Worchel (Eds.), The social psychology of intergroup relations (pp.33-47). Monterey, CA: Brooks/Cole.

ターナー, J. C. 蘭千壽・磯崎三喜年・内藤哲雄・遠藤由美（訳）1995　社会集団の再発見－自己カテゴリー化理論－　誠信書房 (Turner, J. C. Hogg, M. A., Oakes, P. J., Reicher, S. D. and Wetherell, M. 1987 *Rediscovering the social group: A self-categorization theory.* Oxford : Basil Blackwell.)